

第六部(附屬)

第二回参議院文化委員打合会議事速記録第一号

昭和二十三年二月二日(月曜日)

本日の会議に付した事件  
○祝祭日の改正に関する件

午後一時三十分開会

○委員(山本勇) それではこれから委員会の打合せを開きます。祝祭日の件につきましてお諮りをいたしました。祝祭日といふのは今までは與えられた形のものでありましたが、今度は國民の祝祭日といふので、國民の間でも熱意がありまして、多方面の御意見なりプランも出ているようでありまして、非常に結構だと思つております。併しこの委員会といつたしましては、その祝祭日を選ぶに當りましては、これがいいからこれを選ぶとか、あれは止せとかいふような單純なことはできないので、ごこいたしましては、それを選ぶには選ぶだけの基準を以て選んで行かなければならぬだと思つております。今日はどうかこの基準によつてこれを選んで行くかといふことをやつて行こうと思つております。皆さんにも前回の時においてこれについていろいろお考えを練つて来て頂くことになつたのであります。先回の時に三島委員から、前回の時に私が申上げたことを一應御参考にお話し置いた方がいだらうといふような御発言もありましたから、ちよつと私の草案のようなものを申上げて見たいと思つております。

は、祝祭日と休日といふものをはつきり區別させる必要があると思つております。勿論これは休日と祝祭日を一緒にする人もないと思つておられますが、祝祭日には休日がついて参ることが多いものでありますから、祝祭日といふものと休日といふものを可なり取り分けて置かざるを得ないと思つておられます。又その外に官廳の休日であるとか、休暇であるとかさういふふうなものも考へて行きますと、休日といふものは一年の中において相当にありまふので、これは計算の上よりでありまふけれども、三百六十五日の中の働らくのは、或る人によりまして、二百九十日前後或いは二百七十日前後といふに言つておられる方があります。願つて行つておられる国でありますならば別にありますけれども、日本はさういふふうには敗れた後でありまして、新しい國家を築き上げて行かなければならぬといふ立場におられますだけに、労働法やなんかの問題もありませんけれども、この休日の問題につきましては日本を復興させて行く上から余程考へる必要があると思つておられます。

それならば、この祝祭日といふのはどういふものかといふことが次に起つて来る問題と存じますが、祝祭日といふのは、第一には祭る日、それから祝う日といふふうな考へられまふ。祭るのと祝うのとでは少し意味が違ふのだといふ人もありますが、細かい問題は今私としてはここで避けて置きますが、とにかく祭る日、祝う日、或いは記念をする日、或いは追憶をする日といふふうなことになると思つておられますが、これには行事が伴つて来べきものではないかと思つておられます。在來さういふ日には、官中において行事が行われておりました。又官廳とかそれから學校でも行われておたり、おらなかつたりであつたやうであります。一般の民間においてはさういふふうなものは余りなくて、大体は祝祭日が休日と殆んど同じような形になつて来ておりました。併しこれが、今度この祝祭日を定めますには、さういふふうなことではないかと思つて、休日の相當にあるのでありますから、我が國のやうなこれからは新しい國を築き上げて行くこととするに當りまして、祝祭日を定めて行くならば、行事が伴うといふことが可なり大事な点ではないかと思つておられます。併し又この行事をやりますと、形式にばかり流れてしまつて、質実的にはやはり元のやうな休日だけになつてしまふのかも知れませぬけれども、この点は、お考えを頂きたい大事な点の一つだと思つておられます。で、とにかくこれから選ぼうとするところの祝祭日といふものは、考へ方といたしましては、單なる休日ではなくて、國民生活に意義のある日であり、國民がまつてこの日を祭り、或いは祝う、或いは記念することに上つて我々の生活を高め、或いは文化の向上を図る、さうして新憲法の精神に則つて新しい國を築き上げて行くのだといふやうな意欲に満ちた、さういふ日を選び、又さういふふうに行なつて行く必要があるように思われるのであります。そこでさういふ日を選ぶ基準といたしましては、この前にちよつと申上げたと思つておられますが、第一の基準といつたしましては、國民の生活感情に溶け込んでおるところの古いときたり、風習といふものを重んずることが、これはまづ必要であると思つておられます。併しながらさういふ古いときたりの中でも、この新憲法の精神に副わらないものは省かなければいかんかと思つておられます。

次に第二の問題といたしましては、今までのしきたりの中にはなかつたとしても、新しい國を築き上げて行く上からいふと、新しい、新たに今までのしきたりになかつたものでも取上げなければいけない。それは傳統になつていなくても、これから新しい傳統を作つて行くといふふうに、新しいものを選んで行かなければならぬだと思つておられます。その新しい方々を、外國にあつて今まで日本になつたもの、さういふふうなものでも、直訳でなくて、日本の國民生活に溶け込み、同時に又國民生活を高めて行くといふやうなものが考へられます。それから第二には、日本にもない、外國にもない、併しながら今度の場合にはさういふやうなものを取上げた方が

いいといふやうな一つの創案になるやうなものの中に入ることでございませぬけれども、強いて申すれば、特に今日の世の中でありまして、國際的なことといふことが考へられるやうと思つておられます。

以上のように、國民のしきたりになつておるものと、それから新しいものとの、この二つの点が考へられるのであります。それは更に又もう一つ、今のやうなものの中でも、それが國民全体に及ぶものと、それから或る團體に限られるもの、それから地方的なもの、さういふやうな三つに又区分できると思つておられます。で、今度ここでやりますのは、法律にして出すのでありますからして、私の考へといつたしましては、第一の國民全体に關係のあるもの、それを第一の基準として考へて行くべきではないかと思つておられます。尚第二、第三のものも入れて行くか、或いはさういふものを省いて行くか、或いはさういふやうな問題の一つになつて来るだと思つておられます。で、どちらにいたしまして、國民の心を高め行くやうなものであり、國民がこれに親しみを感ずるものでなければならぬから、余り強制的にならないやうにする方がいふので、それは数が余り多いと、或る所では賛成するが或る所では賛成しないといふやうなものも起つて来るでございませぬから、今度この法律で定めるときには、さういふやうなゆるりやうな、法定なものと、それ

からあと国民が自由に、それらの團體なり或いは地方の府縣なりで、それらの所に又そういう会もあるわけでありませうから、そういうふうなものに府縣なり町なり村なりの自由にして、そして法制的に定めて行くものは、先程申しました國民全体に關心を持つようなもの、そういうものから選んで行つたらばよいのではなからうか、こんなふうには私に考えましたので一應申上げましたが、これはほんの私の試案でございますから、これに皆さんの、お考えをお加え頂きますと、諸の緒のような意味で私の意見をちよつと述べました次第でございます。

○三島委員(山本委員) この國祭日の何々祭とか何々節とかいう祭とか節とかいう意味は一應御研究になつたでしようか。若し調査員の方で御研究になつておられましたら調査員の方でも結構でございますが、一應御研究がありましたら伺いたいと思つておられます。

○専門調査員(山村委員) 祝祭日といふ言葉の意味に關しましては、この前簡単に申上げましたけれども、もう一度繰返して申上げます。祝祭日は申すまでもなく漢字でございまして、中國での元來の意味では、祝といふ字は巫祝の祝でありまして、巫祝といふのは占いをやることなのであります。祝の示偏は御承知のように物の合でありまして、それから右の作りの兒といふ字は、兒に見えますけれども、これは人が膝ますいておる形でありまして、從つて吉凶を判断する、占うことから始まりまして、どちらかといふと、日本でいう祝うといふ字は、原義からいふと遠いのであります。祭といふ字は上の左の方は肉であ

りまして、右の方は手であります。それから下は先程申しましたように祭壇でありませうから、祭壇に手で以て肉を捧げて祭る、即ち大體は先祖の祭や何かに使つた字であります。こういう意味であります。それから節といふのは、これは季節の変わり目でありまして、その意味で節といふ字を使つたのであります。從つて祝とか祭とか節とかいふのは便宜上使つておられますけれども、元來の日本語でございませんで、「日本語で假りに「いわり」或いは「まつる」といふように調じておられますが、日本元來の言葉がこれに當るもので適當なものがございませぬなれば、そういうものを皆さんからサジェストして頂きますと、この際どういふ言葉を使うかといふ問題もお決まらなつて置いた方が、法律として出す場合に便宜でありますし、或いは在來の觀念を變えて、新憲法の精神に基いた新らしい國家としてのお祝の日の意味するたとも考えられますが、私は今のところどういふ言葉を使つてよいかといふことは、いろいろ考へておるのでございませぬけれども、なか／＼むずかしい問題でございまして、考へ付かないような次第でございませぬ。

それから西洋のホリデーは、御承知の通りホリデーで、この前委員長が申されましたように、神聖な日といふ意味でございませぬ。ですから休みといふ意味は元來は西洋のホリデーにはございませぬ。ただ神聖な日であるから、その日に行事をやる、從つて休むといふので、元來の意味は、ホリデーといふのは決して休む日といふのはございませぬ。西洋では休む日は日曜

日でございまして、勿論日曜日もホリデーと申しますが、これは後から日曜もホリデーと申しましたので、元はサデーとホリデーとは別に使用しておりました。そういう關係から、先程委員長がおつしやいましたように、休みの日といふのと、それから祝祭日といふのは、別の觀念として區別してお考えになつた方が、基準を決めるときなどに何の混亂をも起さないでよろしいのじやないかと存じます。

○委員長(山本委員) 尙ちよつと私申添えますが、祭といふのと祝といふのと、これは「言海」を引きますと、祭といふのは神を祀ること、それから神を祀る祭、こういうふうには祭の方はなつております。それから祝の方は祝うこと、壽ぎ、或いは賀、こういうことになつております。そして祝といふ字の前にもう一つ「い」といふ言葉がございまして、それの方はあの齋宮といふ齋です。これが日本の言葉としては「い」といふ字で、これが「い」といふ字で、それが變じて祝のやうな意味に來たやうにいわれております。そういういたしまして、この最も分り易い例を取りますと、例へば新年に元始祭といふのがございませぬ。これが行事を伴うところのお祭であります。ところが五日の日に新年宴會といふのがございませぬ。これが祝なんぞでございます。で、その祭がどちらも神に仕えるものでございませぬけれども、それからそのあとで新年宴會をやる、これが祝です。或いは又大嘗會のお祭をする。そのあとで大嘗會がやはり一つの宴會でお祝になる。どういふふうな考へ方でありませぬ。

お祭があればお祝をする。又お祝があれば又お祭するといふふうなのが、大體離れ難いやうなものになつておりますけれども、強いて區別をいたしますと、そのやうな區別があります。節といふのはどういふふうなものか、天長節などといふのがありますから、天長節は唐あたりから起つておると思ひますが、日本の時にすると光仁天皇の時にやはりになつたと祝日本紀に出ていふやうです。だから節といふ字も古いことは古いのですが、これはそれで私から神を祀るといふのは違つたわけでございます。特別にまだ調べをいたしておられません。今私の頭にあるのは大體祭、或いは祝、節といふのはそんなふうな……。

○三島委員(山本委員) 段々お調べのところを伺ひまして有難うございませぬが、内閣で輿論調査をされたときに、十二の日に丸を付けてくれといふやうなことを言われたやうに聞いておられますが、どうして十二といふ日を選ばれたか。その十二といふ数がどうも私にはよく分らないのでございませぬ。三大節とか、五木節とか、初めはまあ昔は三大節と言われて、その後五大節になりました、その外にいろいろ今お述べになりました、委員長或いは専門調査員からお述べになりました祝祭日がそこに加わつておるやうに思われるのであります。十二といふ根拠がどこにあるのか。そして今度私共がこの祝祭日を決めますに當りまして、果してこの十二がいいのかどうかといふことを私は非常に迷うのであります。初めに教を決めてしまふといふことはどんなものなのだろうかといふ疑問を

持つのであります。先ずこれだけはどうしても必要だといふものから決めて行つて、教はそれから出て來るのじやないかといふ氣もするのであります。ここに丁度内閣の方がおられないやうでありますから、専門調査員の方で何か内閣の方からお聞き及びましたら、それを伺ひたいと思ひますが……。

○委員長(山本委員) 私から……三島委員のお説の通りに、あれは非常に疑問なのであります。まあいふものを申すといふことを事務局を通じて私の所に話がありましたので、どういふふうなものを申すことは非常に感づいていかに。總理にしても十二とつきつかり決めてやる基盤があるのならばともかく、ないのならばどういふことを申すことは非常に感づいていかに。だからしてこれは止めて貰ひたいといふことを言つて突つ撥ねたのであります。ところが又何とかして呉れと來て又突つ撥ねまして、三度目に向うの担当の人が三人程揃つて參りましたので、又々そのことを強く主張したのであります。向うの人は実は別に十二でなければならぬといふ根拠はどこにもない。十でもよるしいのだ。ただ数字を取つて行く上に、十とか十二とか、何か区切りがないと統計が取りにくいためにこうしたので。ただそれだけの話なんだとこういふわけで、それならば十二とも何ともしないで、どこに一番國民が關心を持つておるか。そういう点もございませぬから教を決めなうかといふことを話したのであります。それで技術的に困るのだと申す。向うの話ですとやはり十二といふことが必要なんだと申す。或いは十にさ

持つてございまして、先ずこれだけはどうしても必要だといふものから決めて行つて、教はそれから出て來るのじやないかといふ氣もするのであります。ここに丁度内閣の方がおられないやうでありますから、専門調査員の方で何か内閣の方からお聞き及びましたら、それを伺ひたいと思ひますが……。

と、原義からいって遠いのでありま  
す。祭という字は上の左の方は肉であ  
り、下の右の方は祭りの意、ホリデー  
というので、元來の意味は、ホリデー  
というのには決して休日というのでは  
ございませぬ。西洋では休日日は日曜  
のお祭をする。そのあとで大衆、あれ  
がやはり一つの宴會でお祝になる。こ  
ういふふうな考え方であります。で、  
ことを私は非常に迷うのであります。  
最初に教を決めてしまふということは  
どんなものなのだろうかという疑問を  
それでは技術的に困るのださうです。  
向うの話ですとやはり十二ということ  
が必要なんださうです。或いは十にさ

れでも構いませんというので、私の方  
からすると十とか十二とかは問題であ  
りませんので、それでは私の方は關係  
は持たぬ。あなたの方が技術的にやり  
たいというのなら止むを得ない。あ  
なたの方だけでおやりなさい。併し異  
議も國民に注意をして貰いたいこと  
は、十二の日を決めるのではないのだ。  
ただ統計を取る上に便宜上十二にした  
ということはつきりサジエストしろ  
ということを私は申添えました。尙そ  
の点は後から電報を打つとか申しお  
りましたけれども、祝祭日は多い方が  
いいか少ない方がいいか。そうして多  
いとか少ないとか言つても標準が立ちま  
せんから、現在十一ありますのですが、こ  
の十一より多い方がいいか、少ない方が  
いいか、幾日ぐらいがいいかというこ  
とも問うて、そういうふうにする、と  
今のような問題のあれも幾らかはつき  
りして来るだろうからというので、そ  
の点も間の中に入れて貰うように注意  
して置きました。今申ししたような次第  
でございます。

○金子澤文君 私(主として今日の課  
題となつておる祝祭日を選ぶ基準につ  
いて、私の考えを申し上げたいと思いま  
す。  
新らしく祝祭日を設定する趣旨は、  
さつき委員長のおつしやつたように、  
これまでの祝祭日は國民が作つたもの  
でなく、むしろ上から押し付けられた  
ものだ。勿論これまでの祝祭日にも國  
民の生活感情が内包しておるものもあ  
ると思ひますが、とにかく旧憲法の理  
念に基いたものであるから、新憲法の  
理念、即ち民主主義の世界観を内包し  
たものが祝祭日とならなければならな  
い。従つて民族的であると同時に國際

性を無視してはならないということ。  
先ず第一に挙げる。  
次に民族の歴史と傳統を重んじて、  
國民の生活感情と深い繋がりのあるも  
のを選ぶべきぢやないか。而もそれら  
の祝祭日は文化的意義があるものでな  
ければならない。ただ漫然と選ぶので  
はなく、文化的意義を持つものでな  
ければならない。これは先刻、委員長  
もおつしやつたように、今後の日本を  
文化的國家として再建する意味におい  
ても、非常に重要なことである。

次にはこの祝祭日は國定の行事であ  
つて、大体は民間行事に關與しないこ  
とを建前とした。併し民間行事を取  
入れるか、加味した國定行事を定める  
ことも考えられるのではないか。例え  
ば雛祭、端午の節句を併せて考えた子  
供日等がその一例ではないか。

以上を総合して基準を定例的に要約  
すると、民主主義理念に立脚して、民  
族の傳統を重んじ、悲しみであれ、喜  
びであれ、國民の生活感情と深い繋  
りを持つ文化的意義ある日を國定の祝  
日、祭日、記念の日に設定すべきであ  
る。かように考へる。以上でありま  
す。

○委員長(山本勇造君) 外に發言  
は……  
○三木治朗君 先程委員長からお話  
があつた趣旨に非常に同感なものであり  
ますが、私もこの國で法律で決める祝祭  
日というものは、一般の納得のできる  
ものでなければならぬと思ひます。  
従つて数は余り多くないのが適當だと  
考へるのであります。それで又これを  
ただ季節のいい時にうまく按分してそ  
れを休の日として享樂の日とするよう  
な考え方はいけないと思ひます。或

いは寒い時に固まつて続いて行われ  
ても、それが本當に意義のある皆の納得  
のできるものであれば、それが片寄つ  
てもいたし方ないというふうな観点か  
ら、この祝祭日の選考をして行きた  
い、かように考へております。  
○徳川頼貞君 先少し遅れて参りまし  
たので、或いは同様の御意見があつた  
かと思ひますが、祝祭日の決定をする  
上から申して、例へば祝祭日というよ  
うな場合も、祝祭日というよりは、む  
しろ國祭日というより、少くともそ  
の言葉そのものを採らんは別とし  
て、というふうな意味合に考へるべき  
ものではないかと考へるのであります。  
祝祭日というものはむしろローカ  
ルな、地方的な場合であつて、國で定  
める國のあれという場合には、やはり  
國祭日というよりな考へ方で行かなけ  
ればならないのではないかと考へるの  
であります。それは二つの見方があ  
るのぢやないかと思ひます。一つの見方は  
祖先から傳つて来たところの傳統的な  
ものを記念するということ、それか  
ら第三には將來子孫をして前進的な発  
展的なものとしてその日を決めて行  
く。こゝろ二つの意味合から考へら  
れるのであります。そうして例へば水  
産を記念するため日を決めるといふよ  
うなことは、それじやその方は山の方  
の人々には余りそゝういふことにつ  
いては興味を持たない、こゝろ二つ以上のこと  
になる。併しそれだから又それも必要  
だということもあり得ると思ひます  
が、そういうふうな啓蒙的なものより  
も、國を挙げて共にそれをすること  
の方がもつと重要なんじゃないか  
と思ひますので、その点を申し上げて置  
きます。

○委員長(山本勇造君) 徳川さんの今  
のお考への國祭日と言いますときに、  
傳統というのと國祭日というのとどう  
いうふうになりますか。あなたのお考  
えは我々全く同じで、傳統なり祖先  
というところをおつしやつておるので  
が、國祭日というところになる  
と、傳統というのと國祭日というの  
はどういうことになりますか。  
○徳川頼貞君 國祭日と申しますの  
は、つまり國を挙げて、國のあれとし  
てという意味で國祭日と申しておるの  
で、祝祭日というのと何かもつとローカ  
ルなように、例へば地方的なもの、  
それから國全体という意味で私は國祭  
日というのを使ひましたのです。  
○委員長(山本勇造君) この祝祭日と  
いう名称を如何なるものにするかとい  
うこと、これも大事な問題ですが……  
さういふこと、段々に纏めて行き  
たいと思ひますが、まだ外にも御意見  
があると思ひますから、もう少し御意  
見を伺ひまして……。こゝろ二つ以上の  
調子ですと大変これはもう基準が早く  
纏り得るんじゃないかと思ひます。併  
し、併し尙一つ御意見を伺ひまし  
て……。今日は羽仁君が見えておられ  
ませんが、昨日放送討論會が放送され  
したので、私聞いて見ましたが、大体  
さう突飛な考へもないようでした。大  
体こゝろ二つ以上のところに落着くんじやない  
かと思ひますけれども、併しできる  
だけ先ず纏めます前に皆さんのあるだ  
けのお考へをおつしやつて頂きたいと  
思ひます。

○藤田重君 さつきから皆さんのお  
話を承つておるといふれも御尤ものよ  
うに思ひます。それでやはりあとい  
ふふうなお考へで大体纏めておると思  
ひます。

○高田重君 大体今まで皆さんの御  
意見でもう盡きでおるよりに思ひます  
が、先程來のお話で、國を挙げて祝  
うというふうなことに重きを置くべきで  
あつて、これから新らしく啓蒙するこ  
とというふうなことは余り考へない方が  
いいという御意見も出ましたが、この点  
になるとやはり今後啓蒙する啓蒙運動  
という方面からやはり祝祭日といふ  
のを考へていんじやないかと、私は  
さういふ考へを持つておるのでござ  
いませぬ。まあ從來の日本の國で一般國民が考へ  
ていたところを捉われず、今後民主  
的の國家として日本の國を再建して行  
く。これについて大いに國民を啓蒙す  
る、こゝろ二つ以上の祝祭日といふ  
ものもやはり中一つ二つ纏込んで行  
つた方がよい、その点を、私は先程皆

うのです。そこでその定義を決める前  
に、実問題について十なり十五なり  
これまであつた祝祭日の中で残すべき  
ものと、それから新たに加へるべきも  
のと、これを話し合はらうですか  
ね。  
○委員長(山本勇造君) 併し基準が大  
体合はまつて行くかと思ひますけれど  
も、まだそれは決定をいたしてありま  
せんから、その基準をどういふところ  
に置くかというのが定まりましたとき  
に、それで初めて具体的にこれは採入  
れるとか、採入れないとか、或いは又  
採つてもよし、採らぬでもよしとい  
ふような非常に、デリケートな問題が  
出て來ると思ひますから、それを決定す  
る基準がないと、いつになつても水掛  
論になります。先ず基準を定めること  
が必要でございませぬ。どうです高  
田さんあたり又違つた立場から何かご  
ざいませぬですか。

○高田重君 大体今まで皆さんの御  
意見でもう盡きでおるよりに思ひます  
が、先程來のお話で、國を挙げて祝  
うというふうなことに重きを置くべきで  
あつて、これから新らしく啓蒙するこ  
とというふうなことは余り考へない方が  
いいという御意見も出ましたが、この点  
になるとやはり今後啓蒙する啓蒙運動  
という方面からやはり祝祭日といふ  
のを考へていんじやないかと、私は  
さういふ考へを持つておるのでござ  
いませぬ。まあ從來の日本の國で一般國民が考へ  
ていたところを捉われず、今後民主  
的の國家として日本の國を再建して行  
く。これについて大いに國民を啓蒙す  
る、こゝろ二つ以上の祝祭日といふ  
ものもやはり中一つ二つ纏込んで行  
つた方がよい、その点を、私は先程皆

うのです。そこでその定義を決める前  
に、実問題について十なり十五なり  
これまであつた祝祭日の中で残すべき  
ものと、それから新たに加へるべきも  
のと、これを話し合はらうですか  
ね。  
○委員長(山本勇造君) 併し基準が大  
体合はまつて行くかと思ひますけれど  
も、まだそれは決定をいたしてありま  
せんから、その基準をどういふところ  
に置くかというのが定まりましたとき  
に、それで初めて具体的にこれは採入  
れるとか、採入れないとか、或いは又  
採つてもよし、採らぬでもよしとい  
ふような非常に、デリケートな問題が  
出て來ると思ひますから、それを決定す  
る基準がないと、いつになつても水掛  
論になります。先ず基準を定めること  
が必要でございませぬ。どうです高  
田さんあたり又違つた立場から何かご  
ざいませぬですか。

○高田重君 大体今まで皆さんの御  
意見でもう盡きでおるよりに思ひます  
が、先程來のお話で、國を挙げて祝  
うというふうなことに重きを置くべきで  
あつて、これから新らしく啓蒙するこ  
とというふうなことは余り考へない方が  
いいという御意見も出ましたが、この点  
になるとやはり今後啓蒙する啓蒙運動  
という方面からやはり祝祭日といふ  
のを考へていんじやないかと、私は  
さういふ考へを持つておるのでござ  
いませぬ。まあ從來の日本の國で一般國民が考へ  
ていたところを捉われず、今後民主  
的の國家として日本の國を再建して行  
く。これについて大いに國民を啓蒙す  
る、こゝろ二つ以上の祝祭日といふ  
ものもやはり中一つ二つ纏込んで行  
つた方がよい、その点を、私は先程皆

うのです。そこでその定義を決める前  
に、実問題について十なり十五なり  
これまであつた祝祭日の中で残すべき  
ものと、それから新たに加へるべきも  
のと、これを話し合はらうですか  
ね。  
○委員長(山本勇造君) 併し基準が大  
体合はまつて行くかと思ひますけれど  
も、まだそれは決定をいたしてありま  
せんから、その基準をどういふところ  
に置くかというのが定まりましたとき  
に、それで初めて具体的にこれは採入  
れるとか、採入れないとか、或いは又  
採つてもよし、採らぬでもよしとい  
ふような非常に、デリケートな問題が  
出て來ると思ひますから、それを決定す  
る基準がないと、いつになつても水掛  
論になります。先ず基準を定めること  
が必要でございませぬ。どうです高  
田さんあたり又違つた立場から何かご  
ざいませぬですか。

さん方の話以外に感じておる点を一つ申し上げたいのです。

○委員(山本勇造君) 皆さんの御発言を願った方がよいと思うのですが、大隈さん如何ですか。

○大隈信雄君 私も今高田さんの言われた点をさつきから考えていたのですけれども、単に過去の祝祭日と申しますか、そういうものを記念するといつたような意味だけでなく、やはり祝祭日に積極性を持つといえますか、積極的な意味を持たして、それによつて新しい日本の進んで行く途というものをそこから歩まして行くといつたような考え方を相当取入れて頂いた方がよいんじゃないか、そういうふうに感じています。

○委員(山本勇造君) それから若木さん一つ……

○若木謙藏君 大体私の考えておつたようなことは委員長の試案、大隈さんその他皆さんのところで言い盡されておると思うのであります、特段につけるようなこともありませんが、その底に流れるものとして、とにかく國民全体が本心に喜んで祝うとか或いは記念するとかいうふうなところに強い意味を持つて貰いたい。というのは在來の祝祭日で以て本心に國民が誰も彼も喜んで祝うというような形を示したのは或いは新年くらい、新年の祝賀くらいのものでなかつたらうか。あとのものは学校で式をやり、國民一般は休むものなどというふうな恰好を呈しておつたように思うのであります。その点さういうふうなことではなしに、選ばれたところのものは、殆んど國民全体の喜びであり、祝であり或いは行事化するものであるというふうな形に

して行きたいものである。そういうふうに特にお願いしたいと思ひます。

○委員(山本勇造君) それでは一つ來馬委員。

○來馬琢道君 祝祭日のことでちよつと私疑問にしておることがありますので、ちよつと申し上げたいと思ひます。一つは憲法の上において國家が或る宗教に特別な便宜を興えるというようなことがあつてはならぬというような精神がある。それで今後この祝祭日を決めるに於いてその問題をよく考えなかつたやならぬということをおつておる人がおられます。私の発言はもとよりこゝろは、國際親善の日といふものが十二月二十五日のクリスマスと註釈を加えて掲げてあります。これは只今までは大正天皇祭であつたのであります。それがさういふ名で以てここに採入れられようとしておる様子が見えます。同時に四月八日の花祭、お釈迦様の生れた日といふ註釈を附けましてここに掲げられてあります。即ち有力なる候補の中に入つておると思ひのであります。これはここにありません通り權佛会でありませうか、佛生会と言つたり或いは花祭と言つたりして、昔から卯月八日という言葉で日本の國の行事になつておつたものであります。明治の晩年になりましてから、ペルリソで日本の留学生が行いましたときに花祭といふ文字を使つたことが始まりで、遂に花祭という言葉がこの四月八日の權佛会を代表するようになつておりましたのであります。私の考えでは、世界的に大宗教が二つ日本に來ておる。それは即ちキリスト教及び佛教である。こゝろ考えれば國際親善の日と

いう言葉を用いて、十二月二十五日を休日にするよりも、むしろクリスマスにする方がよい。同時に四月八日の權佛会といふところを、これを釈迦といふ名前を付けて、當然世界的に大宗教家の誕生の日であるといふことになりまして、日本に昔からあつた行事をもつとすつと併せた、さうして民衆に適したものにしたいと考へる。さう二つができれば結構であるが、若しもクリスマスの方を國際親善の日といふ言葉で以て將來にして置くとするのならば、或いは權佛会のことと花祭といふ名を以て、事実花が咲く時分であり、花見の時分でありませうから、それによつて昔からあつた行事を現代に活かして行くといふことがよからうと思ひます。外の春分とか、秋分、新年とかいうことにつきましては、諸君の御意見もありませうが、私の立場から申しまして、大胆に我が國が、クリスマスと花祭或いは釈迦といふ日を祝祭日として採用して貰ふことは、大變に道義の國としての立場を明らかにするために必要でもあり、且つ亦有益であります。それが國民性の上に多大の貢獻をするものと信じて、私はそのことを皆線方に申し上げまして、憲法とこゝろ祝祭日との關係についての御意見が伺えれば伺いたいと思ひのであります。

○委員(山本勇造君) 今の宗教の日を採上げるかどうかといふことは、私を先程申しました、どういふふうな基準を立てるか、國民全体のものとして立てる場合と、それから又一つは團體の建前で取る場合と、地方的な建前で取る場合と、三通り大きく分けておるに思ひますが、宗教問題は日本

の場合だと團體の面に入りはせんかと思ひますが、これは標準基準を定めた後で一つその問題は論じて行つた方がいいだらうと思ひます。最初はどういふ基準の下に何を採つて行くかといふようにしないと、これは採るか採らないかといつて、いつまでもやつていと水掛論になりますから、先ず最初に基準を定めようといふことでやつておるのでありますから、基準の問題から入つた方がよろしいだらうと思ひのであります。

○委員(山本勇造君) 今祭と祝のこの中では使われておることの方を私は申したのであります。併し新しく祭といふ言葉で、どういふふうに使つかといふことは、やはりこゝろ規定して行かなければ無理でございませう。

○委員(山本勇造君) それでは服部さん御発言でございませうか。

○服部一君 さつき日本に大きな影響のある佛教の御釈迦様のことを一つつておられますし、それから何かクリスマスの偉大なる世界的感化のあるクリ

スマスといふこともよからうと思ひます。と共に東洋において殊に日本と中國において孔子の影響といふものは非常に大きなものでありますから、又將來日本と中華民國との親善という上からいふても必要であります。この中華國民の祝祭日を見ますと、やはり孔子節といふものが載せられておるのであります。私はやはり孔子といふもの……、名前はどうか、孔子節としますかどうしますか、これは別といたしまして、孔子を入れるといふことはよからうと思ひます。この佛教とクリスマスとそれから孔子とこの三つをやはり祝祭日の中に入れて置きたい、こゝろ思ひのであります。

○委員(山本勇造君) だからこゝろにどれを採つてどれを採らんといふ問題は、順々にやつて行かんと言つて、先ずその基準を決めて、その基準に従つて選んで行くと思ひます。今こゝろ論じておる問題は、どういふ基準の下に我々ここで法律で定めることを祝祭日を選んで行くかといふ問題を言つて頂きたいのです。

○服部一君 基準といふはさつきから段々皆さんの中からお話が出ましたように、大体皆さんの話で盡きておると思ひますが、私といたしましてはやはり國全体が祝祭するといふことになりまして、その内容はさつきから段々とお話がありましたように、將來の日本民族の復興する上において必要なるもの、それから昔からの日本が祝祭日として重んじておつたようなもの、それから又これが啓蒙運動をやつて重んぜさすようにしなければならぬ



うにしたらよろしいだろうと思いが、如何でございませうか。

【異議なし】と呼ぶ者あり】

○委員(山本勇造君) 私は議事進行について一言したいと思つて、服部さんの述べられました孔子祭の問題は一例であります。私共も予想しておつたことであるが、すでに宗教團體法が成立するときに、帝國議會において、この宗教團體法案には、神道、佛教、キリスト教と三つあるが、世界的宗教たるマホメット教はどうするかという質問が

出ました。当時の荒木文部大臣が、その他の宗教といつて中に入つておりました。この問題を議會で明言することによつて、その問題は解決したといふことを記憶いたしております。我が國に興りました新興宗教の中でも、天理教のごときは、つい先頃までは神道天理教といつていたのでありますけれども、今日では神道でなくなつて、天理教といふ一つの宗教になつております。あ

あいつをどうするかという問題が起つて来ると思ふから、こういう問題につきましては、文部省から出た試案の中にもありますように、その日に近い日曜日等におきましてその日を定めるというふうなことで、何とか考慮をすることにして、祝祭日の方にはそれは入れないというふうにお考え願つたならば、ああいう新しい問題が起ることにまごつくことがないと思つて、これは私の意見としてちよつと申上げて置きます。

○委員(山本勇造君) そういう問題は後で議することとしたしまして、尙基準として大事な点は、祝祭日を相当大幅に採るか、それから今のような建

前から行くと、どうしても少くなるかと思つて、國家で國民全体のやる問題でありますから、祝祭日が余り多いのは如何かと思つて、この点についてのお考えも、速記も僅かしか時間がございませぬから、この点も速記に残して置きたいと思つてあります。祝祭日を多く採るか少く採るかという問題については、如何でありますか。

○委員(山本勇造君) 私は、一ヶ年に十乃至十二で止めたいと思つて、先程私もお話しした休日との関係で、日本がこれからどん／＼やつて行かなければならぬといふときに、余りの日が多くなることは問題です。それから、そういう点からも、余り多くならぬといふことをここで決めて置きたいと思つて、御異議ございませぬか。

○委員(山本勇造君) その問題については、初めから、そういうふうな多い少ないというふうなことでなく、先程の建前から来る問題でなからうかと思つて、

○委員(山本勇造君) 勿論それはそれで、一方で労働力が失われて行くことは残念ですから、休日が非常に多くなることは、大體の建前としては、余り多くならないような建前を採つておいた方がいんじやないかと思つて、今度具体的にこれをどうするといふときには、いろ／＼あるでしょう。十とか十二とかいうことは、ただ決められませぬけれども、一つの考え方としては、國で決めるもの

は少くして頂くといふことを、頭に入れて置いていんじやないでしようか。

○金子洋文君 この間から諸外國の例を取つて見ましても、大體十から二十くらいが選ばれておる。教を決めることは、先程の建前、基準からいつて決めるべきであります。大體十から二十くらいの見当において決まつていいんではないかと思つて、だから三十、四十だといふ民間行事も入れて決めるというふうなことは、これはむしろ不賛成であります。

○委員(山本勇造君) それはその程度にしておきまして、もう一つ大事な点は、これは先程三島委員からもお話しになつたと思つて、仮りに子供の日といふのが採用されるかされんかこれからの問題であります。そういうふうな場合には、ただ子供の日だといふだけでなくて、行事を伴うさまざまの催しが行われて、そうしてその思想がずつと繋がつて行きがたつて行くと共に、本當にみんなが湧き上つて来るようになつて行かなければならぬのでございませぬ。

速記の都合もありますので、これにて打合會を閉じまして、あとは懇談をいたしたいと思つて、

午後二時四十分散會  
出席者は左の通り。  
委員長 山本 勇造君  
理事 金子 洋文君  
委員 三本 治朗君  
若木 勝藏君  
國 伊能君  
徳川 頼貞君  
大隈 信幸君

専門調査員

- 岩本 月洲君
- 來馬 琢道君
- 高田 實君
- 服部 教一君
- 三島 通陽君
- 三好 始君
- 岩村 忍君